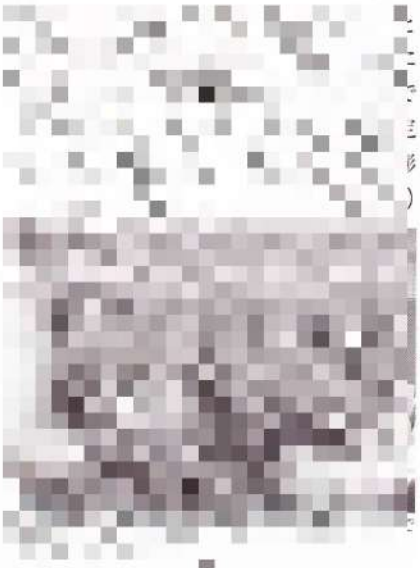

News バイエルン州立歌劇場来「シーズン・プログラム」発表

バイエルン州立歌劇場音楽総監督のキリル・ペトレンコがベルリン・フィル首席指揮者・芸術監督に18年から就任するため、バッハラー＆ペトレンコ体制も集大成へ向かうであろう来シーズンのプログラムが3月13日発表された。それは従来の記者会見形式ではなく、一般公開した舞台上でバッハラー総裁が司会役を務め、ペトレンコにコメントを求めながら、それぞれの演目をテーマにした短い映像で観客たちの「観たい気持ち」を誘う趣向だ。ペトレンコ退場後は新しいバレエダイレクターも公の場に初めて姿を現した。

一説によるとこの新しい試みは、「運営費の40%をチケット収入で賄っている世界唯一の歌劇場」とバッハラー氏が誇る当劇場にとって、ジャーナリストはもはや必要ない、という意味を持っているらしいということで、その真偽がドイツ中で話題になっていた。

ペトレンコが振る新演出は、ドイツを代表する演出家クプファーによる《ムツェンスク郡のマクベス夫人》と、ペトレンコが指揮デビューを飾る《タンホイザー》である。後者はイタリア人演出家、ロメオ・カステッルッチに委ね、指環4部作などで評価されてきたペトレンコのワーグナーオペラの経験に基づき、新しいアプローチでのデビューにしようという意気込みが、いつもより雄弁な印象の彼からも伝わってきた。

その他の演目では、スター歌手の初役ラッシュが目をひく。当劇場で最後に上演されたのは100年以上も前だという《ファヴォリータ》では、妊娠で延期されたガランチャの題名役デビューがようやく実現する。また、ディドナートの題名役デビューとなる《セミラーミデ》は当劇場にとっても初演となる。(1990年にグルベローヴァが演奏会形式で歌っているが) そして、お馴染みミュンヘンのドリームカップルであるカウフマン＆ハルテロスは来シーズン《アンドレア・シェニエ》に挑戦し、ハルテロスがマッダレーナ初役となる。

バッハラー氏は日本ツアーの可能性にも言及し、マチネ終了後に年間プログラムを求める長蛇の列が、この劇場の勢いを物語っていた。 (中 東生)